

## 博士學位論文内容の要旨

氏 名	エグチ チヨ 江口 千代
所 属	人間健康科学研究科 人間健康科学専攻
学 位 の 種 類	博士（看護学）
学 位 記 番 号	健博 第 127 号
学位授与の日付	平成 29 年 3 月 25 日
課程・論文の別	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題名	発達障害の孫との関わりを通して生きる祖母のライフストーリー
論文審査委員	主査 教 授 飯村 直子 委員 教 授 河原 加代子 委員 教 授 西村 ユミ

## 【論文の内容の要旨】

## 1. 背景

近年、見えない障害といわれている「発達障害」が社会にクローズアップされ、子どもの育ちへの支援を国民の責務としてその理解と協力が求められ、発達障害のある子どもやその家族の生活上の困難さやニーズが、より社会に知られるようになった。

しかし、発達障害の孫のいる祖父母が、孫との関わりを通して家族の中で、そして地域の中でどのように生き、生活しているのかは可視化されておらず、社会にほとんど理解されていない。そこで、本研究では祖父母の中でも、特に子育て支援全般に関わりを持つといわれる「祖母」に焦点をあて、発達障害の孫と関わりをもつ祖母の生き方に着目した。

## 2. 目的

研究目的は、祖母が発達障害の孫との関わりを通して、孫やその家族、そして地域の中で生じた出来事をどのように意味づけ、どのように生きてきたのかを記述し明らかにすることである。

## 3. 方法

研究デザインは、ライフストーリー法を用いた質的記述的研究である。発達障害と診断された孫のいる祖母5名に対して、非構造化面接でデータを収集した。データの分析は、語られた内容からそれぞれの祖母が体験した出来事の意味づけを祖母の体験の本質として抽出し、小ストーリーとして小見出しを付け、全体を吟味しながら、祖母のコアとなるライフストーリーを明らかにした。

倫理的配慮は、平成27年度首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理委員会の承認（受理番号15002）を得て行った。

#### 4. 結果

研究参加者である発達障害の孫のいる5人の祖母から語られたライフストーリーは、

【娘が地域の中で孫と生きる姿に学び、理解できなかった発達障害を少しずつ理解しながら、それぞれの家族の成長を見守っていく】、【地域でトラブルを抱える孫の様子に葛藤していたが、専門家の指導という「特効薬」や地域の支援、家族の理解、娘の子育ての姿に支えられ、自己の子育て観や価値観も変化していく】、【親の対応が悪くても、地域の人に見守られ成長していると感じていたが、娘と孫の発したSOSに突き動かされ、今の家族を壊しても守ろうと強い覚悟で支援する】、【家に待望の男児が生まれ喜んだが、「発達障害」の診断に「はねたい」と葛藤し、治療や世間の壁に対応しながら、孫が世間一般に成長することを願う】、【健全に育てたと思っていた娘から生まれた孫の発達障害に関わる葛藤の中で、家族に生じた多くの決断を自らが選択し、地域の専門職に支援を得ていく】であった。

祖母たちは、孫が誕生し「祖母」になり、聞いたこともない「発達障害」という診断名に触れることになった。祖母が、診断名への揺れる思いの中で、発達障害を理解しようと必死になっているとき、専門職の指導や地域住民の言葉がけや支えで、孫との具体的な関わりの方策を学び、孫との関わりが少しずつ楽になっていった。一方で、孫の発達障害による行動特徴は、家族の一人ひとりに様々な思いを抱かせ、子育ての経験者でもある祖母は、家族としてその中に必然的に巻き込まれていった。祖母はわが子や孫を思い、力強く家族の支援を行ない、それを夫である祖父に支えられていたという祖母のライフストーリーがあった。

#### 5. 考察

祖母たちは、孫の「発達障害」という診断に翻弄されながら、「見えない障害」であるからこそ、それは何なのか、孫にいったい何が起こっているのかと、とまどっていたと考えられる。発達障害の孫の症状の中に見え隠れする「普通」と「障害」の境目で悩み、発達障害という診断名を「はねたい」という、できればなかったことにしたい気持ちの中で揺れていたと推察される。

しかし、祖母は、家族の支えや地域住民の見守り、温かい言葉に支えられながら、専門職に支援を得て何とか発達障害の孫への関わりを学び、その関係性を築いていった。一方で、子どものこだわりや多動に関わる家族の思いも揺れ、家族としての機能は次第に不安定になった。祖母は、家族のこの不安定な様子を舵取りしながら支え、自らは夫である祖父に支えられ、持てる力で家族を支援していたことが明らかになった。